

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

岩崎貴宏 美術家

Takahiro Iwasaki / Artist



CREATOR INTERVIEW

No
125

岩崎貴宏 Takahiro Iwasaki

1975年広島県生まれ。広島県在住。

岩崎貴宏は、歯ブラシ、タオル、文庫本の葉、ダクトテープなど身の回りの物で、繊細で儂い風景を作り出し、見慣れた日用品を別のイメージに転化することで、固定化された私たちの視点を揺さぶる。床に雑然と積み上げられたタオルに鉄塔が建つ様は、山奥の送電線を支える鉄塔を想起させ、林立する文庫本の葉にクレーンが建っている様は、まるで建設中のビル群を見ているようだ。また、岩崎は、歴史的な建築物の地上の実像と水面に反射する虚像を一体化させた様を、ヒノキの木片で精巧に再現する「リフレクション・モデル」シリーズも制作している。これら作品が生まれた背景には、岩崎が生まれ育ち、現在も拠点にしている広島という都市が、原子爆弾によって一瞬にして壊滅し、戦後復興期に軍事都市から平和都市へと180度転換した史実からの影響が見て取れ、岩崎自身の時間への意識を感じさせます。2017年には、第57回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館代表に選出され、個展「逆さにすれば、森」(2017年)が開催された。その他、近年の主な個展として、2015年に、「岩崎貴宏展 埃 (10-10) と刹那 (10-18)」(小山市立車屋美術館)、「岩崎貴宏展 山も積もればチリとなる」(黒部市美術館)、ニューヨークのアジアソサエティで個展「In Focus」が開催された。

クリエイターインタビュー

『都市を表象する“日用品”のありかを探る』

No

125

岩崎貴宏 美術家

TAKAHIRO IWASAKI / Artist

土地に根付くアートから、マクロな都市空間が見えてくる。

published_2021.3.3 / text_ikuko hyodo

歯ブラシ、タオル、ダクトテープ、文庫本の葉、シャーペンの芯など、身の回りにある日用品を使って俯瞰的な都市の風景を生み出す、美術家の岩崎貴宏さん。一見雑然と重ねられたタオルの山の上に鉄塔が建っていたり、ビルのように林立する本から繊細なクレーンが空に向かって伸びていたり。虫の眼と鳥の眼のような異なるスケールで、物事の本質と全体像を捉えて提示することで、私たちの視点を揺さぶります。そんな岩崎さんの眼に、東京や生まれ育った広島はどう映っているのでしょうか。そしてコロナを経た先に、どんな都市の風景を思い描いているのか、お聞きしました。

広島を " 原爆体験 " を通じて得た、都市を俯瞰する視点。

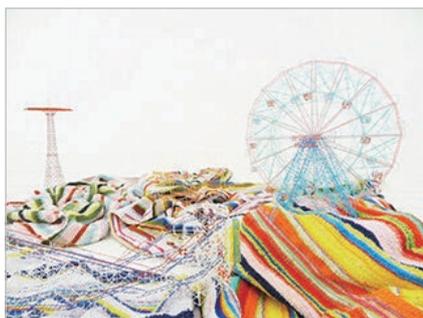
僕が作品制作を通じて都市の風景を扱うようになったのは、故郷であり活動拠点でもある広島を歴史というのがすごく影響していて。広島は、今から 76 年前に原子爆弾、つまりマイクロなウラン原子が上空 500m で炸裂して、マクロな都市だけでなく、郷土の歴史という大きな時間軸も一瞬で破壊し尽くされてしまった。自分たちはそういう街で生まれ育ったわけです。それはたとえば「エヴァンゲリオン」のセカンドインパクト後の世界や、「AKIRA」で言えば東京が破壊された後の " ネオ東京 " に生きているようなもの。要するに、自分たちが生まれる以前に巨大なカタストロフがあった都市に生きているんですね。そういうわけで、都市に対してジオラマ感というか、一瞬で消え去るようなもろい空間感が僕の中にあるんです。それは高度経済成長期以降、スクラップ&ビルドを繰り返している都市すべてにおいてもそうで、やっぱりもろさや移ろいやすさを感じてしまいます。

小学生の頃は、飛行機が上空を通るのが怖かったんです。また原子爆弾を落とされると思ってしまうから。僕だけでなく、同級生も似たようなことを言うんですけど。広島为学校に通った子どもは平和教育を受けているので、8月6日の8時15分、上空をブーンと飛んでいる飛行機から原子爆弾が落ちてくる様子を、アニメやドラマ、小説などで何度も何度も刷り込まれるんですよ。真っ青な空に銀色の機体がキラッと光って、次の瞬間、真っ白になるっていうイメージを。僕が子どもの時は、広島空港が当時まだ広島市内にあって、小学校の上空を飛行機がしょっちゅう通っていたんですね。それがすごく嫌で、「あ、次の瞬間消えてしまうかも」という恐怖心をリアルに抱いていました。そんなこともあって、上空からの視点というか、都市を俯瞰するような視点を疑似体験している。トラウマってほどでもないかもしれないけれど、子どもの頃にそういう視点を否応なしに持たされたわけですから。都市のフラジャリティに対する恐怖心は、そういった体験にも源泉があるのだと思っています。

だから、大学の古美術研究で京都に行った時は衝撃でした。何百年も残っている建物を目の当たりにしながら、歴史や文化のにおいをはじめ吸って、「え、こんな世界があるのか」と。僕が留学したスコットランドのエディンバラも500年前から残っている都市で、街自体が世界遺産に登録されているのですが、その風景もやはり衝撃で。自分の生まれ育った街がいかにもプラモデルみたいなものだったのかを突きつけられました。

都市を表象する日用品というマテリアル。

「アウト・オブ・ディスオーダー」シリーズのような、歯ブラシやタオルなどの日用品を作品に用いることが多いのですが、これもまた生まれ育った広島と関係しています。僕が中学生の時に広島市現代美術館が開館したのですが、それ以前は美術館に行くといったら広島平和記念資料館なんですよ。そこに展示してあるものの多くは日用品なんです。たとえば、ボロボロになった服や焼け焦げたお弁当箱のような、都市が破壊され尽くして残ったものです。資料館ではそういった日用品が、都市全体を表象させるものになっていて。あとは、壁に黒い雨が染み込んで垂れている光景とか、家が燃えてできた煤が雨と混ざって黒いラインを落としている光景とか。そういう日常的なものが特殊性を持ち得ていることについて、当時はかなり気になっていました。



アウト・オブ・ディスオーダー

タオルの繊維、ブラシの毛などの日用品を素材にして、鉄塔や架線、鉄骨といった巨大な構造物をジオラマサイズの風景に見立てる、岩崎さんの代表的なシリーズ。アウト・オブ・ディスオーダー（コニーアイランド）2012

©Takahiro Iwasaki, Courtesy of ANOMALY



広島市現代美術館

日本初の公立現代美術館として 1989 年に開館。企画展の他、約 16,000 点以上の所蔵作品の中からテーマごとに作品を紹介するコレクション展を開催。建物は黒川紀章氏が設計。現在は改修工事に伴う長期休館中で、リニューアルオープンは 2023 年 3 月の予定。

作品に日用品をよく使うようになったのは、エディンバラに留学してからなのですが、当時お金がなかったという理由もあって。本当に貧乏で、マテリアルを買えなかったんです。「画用紙が 200 円もするんだ。だったらジャムを買えるな」って、結局ジャムを買っちゃう（笑）。そうすると家にある広告の紙や、道に落ちてる輪ゴム、タバコの箱なんかで作品をつくらうってことになって、よくよく考えれば、タバコの箱も解体すれば画用紙じゃん、と思ったりして。

うちは父親が自営業でケーキ屋をやっていて、店の前に洋服屋があったんです。洋服屋って厚紙が結構出るんですけど、母親が「これで何かつくりなさい」と大量にもらってきてくれて。ずっとひとりでロボットとかをつくっていたんですが、中学生の時にそれを友だちにはじめて見せたら、「材料を買わずに、そんな汚いものをつくってるの?」と言われてショックを受けて、それまでつくったものをその時点で全部捨てちゃったんです。大学ではデザインを専攻したこともあって、「作品はきれいにつくるもの」と学んだのですが、エディンバラに留学したら、向こうの人たちはアバウトだから、何かをつくるにしてもセロテープや糊がはみ出してもまったく気にしない。それを見て、そういえば自分も小、中学校くらいまでは、こんなふうが好き勝手にロボットをつくってたのに、どうしてやめちゃったんだろう、と羨ましく思って。その体験もきっかけになって、また日用品を使うものづくりに戻っていったんです。



岩崎貴宏 美術家

TAKAHIRO IWASAKI / Artist

published_2021.3.3 / text_ikuko hyodo

生まれ育った土地への誇りが独自性を生む。

広島を活動の拠点にしている理由には、経済的なことや自分のアイデンティティなどいくつかの側面があります。もちろん東京のような大都市に出ていきたい気持ちもあったのですが、東京は1日生きていくのに結構なお金を稼がないといけない。であれば、極力お金のかからない場所で、ゴミを拾って楽しく作品をつくれなかなっていう。だからお金のために働かないぞっていう意志を持った時、ランニングコストが低い場所として、生まれ育った広島が重要なポイントになったんです。

あとはスコットランドの首都であるエディンバラの人たちって、大抵イングランドが好きではないんですよね（笑）。なんでこの人たちはロンドンに出ないんだろうって最初は思ったんですけど、「ロンドンなんか全然興味ねーし、俺たちには俺たちの歴史があって、アートがあるから」って感じで、スコティッシュ・アーティストという故郷に誇りを持っているんです。その姿を見て、大都市に出ていくよりは、生まれ育ったところの文化を自分たちがどう継承して、それを次に繋げていくのが大事だと思いました。住むところを東京にした時点で、周りの人と同じモチーフや土俵で争わなくちゃいけないけど、プロセス自体に他の人と何かしら変わったところがあれば、生まれてくるものも自ずと人とは違うものになるはず。そもそもの前提を変えることによって、必然的にある種の独自性が生まれるのかな、と。

とはいえ、東京などの大都市は才能が溢れ返っている場所でもあるので、羨ましさもずっとあります。ただそれも諸刃の剣で、才能のある人たちに触発されるのは大きいポイントと言えるけど、同時に才能の消費も早いからすぐに新しいものを求められて飽きられるか、もしくはすごい人と出会ってかなわないと感じて、諦めてしまうようなリスクもある街だとは思っています。だから僕としては、たまに刺激をもらいに行くのが一番いい距離感ですね。

東京はビルボードでアイデンティティが変わる。

東京とエディンバラを比べると、エディンバラは広告や看板を出してはいけないところがほとんど。いつ行っても街並みが変わらないので、人によっては退屈なイメージを抱いてしまうと思うんですけど。一方、東京はものすごい数のビルボードがあって、それらが変わることによって、街の風景や印象が大きく変わるんですよ。このあいだ渋谷に行ったら、FOREVER21だと思っていたところに IKEA のデカイ看板が出ていて、それだけで渋谷の街が違って見えました。そもそも僕が高校生の時は、同じ場所に HMV があって、すごく尖った街だと思っていたのに、いつの間にか家具の街になっているのが不思議だなあと（笑）。グラフィカルなインターフェイスが変わることで、街の印象だけでなくアイデンティティも変わりうる、いい例だと思います。

六本木の街の印象は、美術館やギャラリーが集まっている場所。他には、個人的に青山ブックセンターがなくなってしまったことが悲しい。広島には洋書やアート本などを扱うような書店が少ないので、東京に行ったら本屋を覗く行為が自分としては結構重要だったんです。青山ブックセンターに行きたいがために、わざわざ六本木に行くこともあったので、そういった場所は僕にとっての六本木の魅力のひとつでした。



岩崎貴宏 美術家

TAKAHIRO IWASAKI / Artist

published_2021.3.3 / text_ikuko hyodo

今はみんなが知恵を使う時。

コロナ禍を経て街や人がどう変容するのかという問いに関しては、僕は社会学者ではないので、具体的にはわかりません。ウイルス自体も変異しているし、政治は常に流動的だから、自然に、なるようになっていくのだと思っています。ただ、今だからこそ推し進めてほしいのは、一極集中を分散させること。東京にいる才能豊かな人たちを、もっと地方に送り返してほしい。東京で学んだ人たちが広島にたくさん来てほしいし、山口や岡山、鳥取、島根にも来てほしいんです。この先、VR とか仮想現実を含めたりモートはますます盛んになっていくはず。だからこそ才能のある人たちが、場所を選ばず東京の外に出られるタイミングでもあると思うので、その流れを押し進めるような政策を打ってほしい。そうすれば展覧会だって東京に集中する必要がなくなるし、行きたい展覧会が各地に分散したら面白くなるんじゃないですかね。

広島もそうですが、今は外から人が入ってこないよう要請している地域が多いですよ。とりあえずコロナ禍が収束するまでは、広島は広島内で、岩手は岩手内で楽しむ文化を各地域が育む時期なのかもしれない。そして海外から人が自由に来られるようになった頃には、魅力が地方に分散されて、日本全体の魅力も増していればいい。アーティストはどこにでもいるし、魅力的だったらその土地へ移り住むようなフットワークの軽さがあるから、コーディネーターやキュレーター、ギャラリストのような、アートのインフラを支えているような人たちが、地方に分散していけると面白いと思うんです。面白いキュレーターがいれば、若いアーティスト内ですぐに噂になっちゃうだろうから（笑）。そういう人たちはおそらく、アーティスト以外にもさまざまなネットワークを地方に連れて行くこともできるはず。東京のネットワークを地方に持っていくような動きが重要なのだと思います。



ART BASE 百島

広島県尾道市の離島、百島の旧校舎を活用し、2012年に開館したアートセンター。現代美術作家の柳幸典氏がディレクターを務め、地域再生を目指した展覧会、ワークショップ等を実施。施設内には、岩崎さんの作品《アウト・オブ・ディスオーダー(万物流転)》も常設展示されている。他にも広島では、港湾倉庫や空き家等を利用した施設、プロジェクトが複数立ち上がっている。

昨年から今年にかけて、渋谷スクランブルスクエアの SHIBUYA SKY で個展「FOCAL DISTANCE | 焦点距離」をしたのですが、搬入を終えた早朝、人のいない展望台から、富士山が見えました。まさか渋谷のど真ん中からこんなにクリアに富士山が見えると思わなかったもので、衝撃的な光景で。コロナ禍で人の行き来がなくなって、インドでは大気汚染が改善されてヒマラヤ山脈が数十年ぶりに見えたとか、ガンジス川がきれいになったという話もあります。渋谷から見えた富士山がコロナの影響かどうかわかりませんが、今まで当たり前だったこと、こういうもんだと思っていたことを変換できるタイミングにいる気がします。だからコロナが収束したら大量のエネルギーを使っていた元の形に戻るのではなく、新しい形態に行くことが大切というか。これまでの資本主義を新しい形に持っていくタイミングだと思うので、そのためにもみんなが知恵を使わないといけない時がきていると思います。



FOCAL DISTANCE | 焦点距離

渋谷スクランブルスクエアに開業した展望施設「SHIBUYA SKY」の1周年を記念して、46階の SKY GALLERY で 2020年11月1日～2021年1月17日に開催された個展。「視点を広げる」というテーマのもと、岩崎さんが SHIBUYA SKY の体験からインスピレーションを受けて制作した作品を主軸に展開。

テクニク・モデル

2020

撮影：三嶋一路

©Takahiro Iwasaki, Courtesy of ANOMALY



岩崎貴宏 美術家

TAKAHIRO IWASAKI / Artist

published_2021.3.3 / text_ikuko hyodo

コロナ禍で内向きなアートにも光が当たる!?

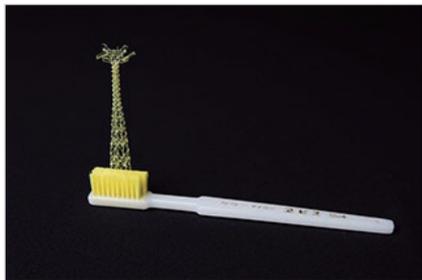
今、あらためて昨今のアートシーンを振り返ってみると、最先端のアートってインタラクティブというか、参加型だったり大型なプロジェクト型だったり、外に開く力やいわゆるコミュ力か試されるようなものが多いですね。一方で僕は一人でちまちまつくっているせいか、ワークショップみたいなものが苦手なんです。以前、自分がつくる手法を用いて、ワークショップでみんなにも何かをつくってもらおうと思ったら、「こんなの、一般の人ができるわけがない!」と言われてしまって。昔ながらの職人気質があるので、様々な人を巻き込んで作品が生まれるような、コミュ力の高いアーティストが羨ましかったです。

一方で、このコロナ禍を通じてこれから何か変化が生まれるとしたら、僕みたいにスタジオに籠って孤独に制作している人たちの作品も、再び見直されるかもしれない、という予感もあります。美大で学んでいる学生の中には、インタラクティブなことが本当は苦手だけど、そういうことをやらなければいけないと考えている人も、おそらくいると思うんですよ。だけど図らずともコロナでこんな自宅待機状態になり、みんなが同じ環境で授業をするのではなく、オンラインを介して家で細々とやるからこそ、あらためて身の回りから思いつくアイデアが出てくるはず。そういったことに脚光が当たるようになるのも、それはそれで新しいのかなと感じています。

なので、疎外的な環境から孤独感を持った作品が生まれてくるだろうというイメージが僕の中であって、それはそれで楽しみです。アーティストがやるべきことは、とにかく作品をつくり続けること。インタラクティブなことをやっていた人たちも、ネットや VRなどを駆使してより複雑に人とつながる表現方法を探求していくでしょうね。今後は作品自体の多様性が、また少し違う意味合いで広がってくるのではないかと期待しています。

六本木の街に " 眠っている " アートを拝見。

普段はその土地や歴史に応じて作品を制作しているのですが、そういった制作以外で街を眺めてみて、気になっていることがひとつあります。自分の作品を買ってもらった " その後 " をあまり知らないんですよ。歯ブラシの作品を「トイレに飾ってます」という人から、iPhone で撮った写真を見せてもらったり、個人で展示スペースをつくっている人にプライベートで招待してもらったくらいかな。コレクターたちの手に渡った作品がどんなふうに飾られていたり、保管されていたりするのかわかることができたら、もっと面白いだろうなと思って。



歯ブラシの作品

「アウト・オブ・ディスオーダー」シリーズのひとつ《bush》。歯ブラシのブラシ部分から繊細な鉄塔が立ち上がる。

アウト・オブ・ディスオーダー (藪)

2015

撮影：村田冬美

©Takahiro Iwasaki, Courtesy of ANOMALY

六本木にはアートコレクターの方がたくさんいると思うので、どんな作品を買って、どんなふうに飾っているのか、オフィスやお宅を拝見するツアーをしてみたい。というのもニューヨークで以前、1年に1回くらい開催しているコレクターのお宅拝見的なイベントに参加させてもらって、発見が多かったんです。たとえば美術館で絵を見ても、巨大な空間でいまいものとしてのリアリティが湧かなかったけど、オフィスや家の壁にちょこっとかけてあったりすると、すごくかっこよくて、買えるんだ、自分もこの作品がほしいなと思ったりするんですよ。

僕は作品をつくる側の人なので、コレクションする感覚がわからなかったんですけど、作るだけではなく飾って日常にハリを与えるのっていいなとその時はじめて思いました (笑)。地方でやっても面白いと思うんです。床の間が私設ギャラリーみたいなものだと考えると、日本人はもともと家の中にギャラリーを持っていたわけだから。六本木の街にどんなアートが眠って独り占めされているのか。珍品でもいいから、垂涎の逸品を見たい。今の IT 関係の人は、どんなものを買ってどう楽しんでるんだろうなあ。

取材を終えて

コロナ以前、東京の人口流入は全国で最大でしたが、今、その流れが変わろうとしています。広島を拠点に活動する岩崎さんには、東京で暮らし、東京を活動の場にする人とは違う、都市の姿がおそらく見えているのでしょう。私たちが当たり前と見て見過ごしがちな現実を、対象との距離や、スケールを変えて可視化することで、新鮮な驚きを与えてくれる岩崎さんの視点。立ち止まらざるを得ないこんな時こそ知恵を使い、新しい未来を築くことができる。スクラップ&ビルドの絶好のタイミングなのだと教えてもらいました。(text_ikuko hyodo)

※画像はオンラインインタビューで撮影した画像を使用しています。